

IZUMO3

-THE BIRTHDAY EVE-

著 箕崎准

【序章】

星々の瞬きで燦めく天の川。

その傍らには織女星と名付けられた、ひとときわ明るく輝く星がある。織姫と牽牛の物語で知られる、七夕伝説で有名な星だ。

そこには広い敷地面積を持ち、煌びやかな意匠があらゆる所に散りばめられた壮麗な宮殿が存在している。

その宮殿は今、嘆きのような低い唸りを立てながら倒壊を始めていた。

柱が折れ、壁が崩れ、屋根が落下している。

それらが瓦礫となり、大地の上に積み上がってゆくこととはない。

落下中にいくつもの光の粒に分解してきらきらと瞬きながら消えてゆくからだ。

その光景は一目見れば足を止め、身動きをすることができなくなるほどに美しいものだった。

しかし、残念ながらその姿を見ることができた者は誰

CAUTION!

本書はスタジオ・エゴのゲーム『IZUMO3』をベースにした二次創作物であり、ゲーム本編にはない妄想設定なども多量に含みます。

一人として存在しない。

宮殿の創造主も、創造主を倒した人間たちも、既この場所から立ち去っていたからだ。

残されているのは、滅びゆく宮殿と巨大な竜の亡骸だけ——例外なくその周囲にも光の粒は降り注ぎ、きらきらときらめき続けていた。

命を失った竜を弔い、天に送っているようにも見えるその光景——

その時、竜の背中が音を立てた。

一筋の線が竜の背に走り、亀裂が走ったのだ。

その内側から溢れ出したのは、天空に向かって伸びゆく一本の細い光の線。

瞬時にそれは太さを増して、裂け目を更に押し広げてゆく。すると、光の数は一気に増加して、放射状に拡散していった。

揃って膨張してゆく光たち。

それらはやがて大きな一つの束となって天空の星々を覆い隠し、辺り一面を真っ白に染めあげてゆく。

数秒後——光が収まり、世界が元の色を取り戻し始めたときのこと。その場所から、壊れかけの宮殿も、竜の亡骸も、姿を消していた。

代わりに現れたのは、一人の少女——背に数多もの星々を従え、宙に浮かぶ少女の姿だった。

整った目鼻立ちに、足下まで伸びた美しい黒髪と比するような白い肌——まだ幼さの残るほっそりとした体つきながら、ふくよかな女性的魅力も兼ね備えた曖昧なラインを持つ少女の周囲には、うっすらとした靄のようなものを見ることが出来る。

「オリヒメ……聞こえますか？ 私の声ガ、聞こえますか……？」

虚ろな瞳で遠くを見つめながら、愁いを帯びた声で少女は呟く。すると、その身体を覆っていた靄が膨張し、強い光を放ち始めた。

竜の身体から溢れ出したものと酷似した光だ。

同じように光は膨張し、辺り一面を真っ白に染めあげてゆく。

【断章1】

タナバタツメの村を若い女が訪れていた。

白い小袖に紅袴と、一目見れば誰でも巫女だと判る身なりをしたその女は、桜を模した髪留めで美しい黒髪を二筋に分け、響無鈴で纏めて結んでいた。

女の名はサクヤという。

北方のイズモのクニから、クマソのクニを越えてこの村にやってきた。

イズモのクニとタナバタツメの村——

二つの集落の距離は、子供の足で歩いて、一晩で移動できる程度にしか離れていないのだが、その旅路といえは容易ではない。

間に位置するクマソのクニが双方の集落と対立しているからだ。

特にイズモのクニとクマソのクニは一年の間に何度も戦端を開く程に険悪なもので、今は休戦中であるのにクマソはいつでもイズモへの侵攻を再開できるように、常

やがて、世界が元の色を取り戻した時、今度は、少女の姿が消えていた。

その場所に残されていたのは夜空に漂う星々と、織女星の大地だけだった。

時行路に精鋭部隊を展開しているほどだ。

だからといってクマソの兵隊から逃れるために行路から離れ、森の中を歩けば良いのかといえはそうでもない。行路から離れば、悪霊に襲われる可能性が高くなるからだ。

悪霊は人を発見すれば見境無しに襲ってくる人類の天敵で、その強さは悪霊の種類にもよるが、弱くても常人以上——強いものならば名のある武者でやっと太刀打ちできるほどのものだ。

サクヤは弓術に長け、霊術も使用することができる優秀な戦巫女だが、それでも悪霊との戦いは容易なものではない。できれば避けたいとも思っている。

それでもサクヤは月に一度、クマソの兵隊を避け、悪霊たちの間をぐり抜け、たった一人でふたつの集落の間を往復していた。

もちろん、ただの酔狂でそのようなことをしているわけでは無い。

サクヤが村を訪れるのには理由がある。

村の社に住む、一人の少女に会うためだ――

旅路の無事にほっと胸を撫で下ろしたサクヤは、朱い鳥居をくぐり抜け、社の中に足を進めてゆく。

すぐに視界に入ったのは、境内の前にある広場だ。

そこにはサクヤと同じような巫女装束を身に纏った、大きな赤いリボンで髪を結び、紅袴に大きな響無鈴こなれをくくりつけている少女が居た。

彼女こそが、サクヤの会いに来た少女だった。

名はカヤノという。

弓を構え、遠方的に真つ直ぐな眼差しを向けていた。ぱあんと、カヤノの手元で弦が激しく音を立てる。

すぐにどすりと、重い音が境内に響き渡った。

カヤノの手を離れた矢は美しい放物線を描き、壁際に備え付けられている木製の中心に突き刺さったのだ。的には他にも矢が数本突き刺さっていて、そのほぼ全てが的の中心部に集中していた。大きく外れている矢や、砂地の上に落ちている矢は一本も無い。

てください。こっちはかなり伸びたと思うんです」

数歩後ろに下がったカヤノは、一呼吸置いて瞳を閉じた。すると、カヤノの身体の周囲に白い霧が浮かびあがる。(まさか、これほどまでにカヤノの霊力が強くなっているなんて……)

全身に張り付くほどの強い霊力にサクヤは息を飲んだ。これだけの霊力があるならば、既にタナバツツメの村の鎮守の責務を果たすことは十分に可能だろう。

本来それは喜ぶべきことなのだが、サクヤは素直にそうすることができなかつた。

「お姉さま、いかがでしたか？」

「本当に驚いた。想像以上よ。ずいぶん頑張っているようね」

カヤノに心中を悟られぬよう、サクヤは精一杯の微笑みをつくって答えた。

「まだまだですよ。この程度ではお姉様には全く及びませんし、ご先祖さまたちにとって敵いません」

照れたようにカヤノは笑う。

カヤノが弓を手にしてからまだほんの数ヶ月しか経っていないのに、その腕はかなり上達しているようだった。特に、この一月の上達は目覚ましいものがある。

先月は半分も的に命中していなかったのだ。

この一月の間、カヤノは日夜弓を手放すことなく修練に明け暮れていたに違いない。同じ弓を扱う者として、サクヤにはその苦勞が痛い程によく理解わかる。

その努力を労い、敬意を表すためにも、サクヤは両手を打って拍手をした。

「サクヤお姉さま！」

サクヤの姿を捉えたカヤノの表情に、ぱつと花が咲く。「お姉さま、来てくださったのですね！」

サクヤの豊満な胸元に飛び込み顔を埋めたカヤノは、柔らかな肉体を両腕でぎゅつと抱きしめた。

「ずいぶん弓の扱いに慣れたようね。正直驚いたわ」

サクヤはカヤノの頭を撫でる。

「どうやら、背も伸びたみたい」

「ほんの少しですけどね。そうだ、お姉さま。霊力を見

本当に無垢な、可愛い笑顔だった。

だが、その笑みがサクヤには重く、痛々しく感じられしてしまう。

それは、カヤノが血も滲しみむような努力をしていることを知っているからだ。

そして、その努力の行き着く先も――

「カヤノ、いつものご褒美よ」

サクヤがそう言うと、カヤノは瞳を閉じる。

カヤノが良いことをしたとき、カヤノを褒めるとき、サクヤが額に口づけをするのは、二人の間の儀式のようなものだった。

サクヤの唇が、カヤノの額に触れる。

「ありがとうございます、お姉様」

幸せいっぱいの表情を浮かべるカヤノに、サクヤの胸はまた痛んだ。

カヤノには課せられた使命がある。

それは本来彼女が生を受けたときから定められている

もので、彼女が生きているということは、彼女が与えられたその役割を果たすということだ。

タナバツツメの血を継ぐ者として、夢を紡ぐ力を持つ者として、その身を賭してこの村を守ること。

姉や、母や、祖母が——先祖代々そうしてきたのと同じように生きること、カヤノは宿命付けられて、この世界に生を受けた。

カヤノはそれを理解した上で、日々、身を粉にして研鑽を積んでいる。

形振り構わぬその姿は、近くで見ているにはあまりにも痛々しく、心苦しいものだった。

それでもサクヤは、そんなカヤノの姿を見守り続けなければならぬ。

そして、祈り続けなければならぬ。

カヤノをこの場所から救い出してくれる人が見つかりますように、と。

勝手な願いだとは理解している。

【第一章】

甘い香りに誘われて工藤駆は目を覚ました。

瞼を開きベッドの上から身体を起こすと、朝の陽光が一気に襲いかかってくる。

「朝、か……」

瞳を細めて瞼を擦りあげた駆は、パジャマの上から感じるぬくもりを味わいながら、大きく伸びをする。

甘い香りと、柔らかな陽光に包まれて迎える朝の目覚めに、駆はとてもあたたかな幸せを感じていた。

幸せ——

そのような感情をこの部屋で抱くことになるなんて数ヶ月前の駆には考えられないことだった。

このワンルームマンションの一室は、寝起きをするだけの場所という認識でしか無かったからだ。

生きていくために必要なもの、最低必需品程度の感覚だった。

のは、サクヤ自身でもあるのだから。

それでも、サクヤは願わずにはいられない。

カヤノが運命という名の軛から解き放たれて、幸せになることを——

それが彼女の、何よりの願いなのだから。

だから、部屋には最小限の物しか置いていない。

部屋の内装も簡素なもので、部屋に敷かれたカーベツトも、窓際に掛けられたカーテンも、スーパリーのセールで買ったシンプルなものばかりだ。

今では少し物は増えたが、内装も雰囲気もその頃とは殆ど変わってはいない。

それなのに、これほどまでに印象が違うのは——
「おはよう、おにちゃん」

その声があるからだ。

鼻腔をくすぐる料理の香りよりも甘く、朝の陽光よりもぬくもりに満ちた声で朝の挨拶を投げかけてきたのは工藤舞菜——駆と同じ工藤の名字を持つ少女は、駆の妹である。

「おはよう」と、駆は挨拶を返す。

舞菜は小柄な身体に適した小さめのエプロンを身に纏い、申し訳程度に備え付けられたキッチンの前に立っていた。

どうやら朝食を作っているようだ。

フライパンの上で、舞菜の持つ菜箸が踊っている。
「珍しいな、お前が朝食を作るなんて」

「今日はカヤノさんがお寝坊さんみたいだからね。久しぶりだし、カヤノさんほど上手くは作れないかも知れど、がんばるから楽しみにしておいて」

本当に舞菜が料理をする姿を見るのは久しぶりのことなのだが、その手つきは充分に慣れたもので、一連の動作を見ていると、カヤノの姿と重なって見えてくるほどだった。

カヤノ——

アシハラノクニと呼ばれるこの世界とは対の存在であるネノクニと呼ばれる世界からやってきた少女。

今では駆の恋人でもある。

身体が弱く幼い頃から入退院を繰り返していた舞菜と、異世界からやってきたカヤノ——駆と共に一つ屋根の下で暮らしている二人は、その生い立ちのせいもあって、どちらも料理が得意では無かった。

しかし、二人はそれを払拭しようと特訓をして、その

三人だけ二人分。

舞菜が意地悪をしているわけでも、数を間違ったわけでも無い。

今の駆たちにとって、それは当然のことなのだ。

「ふああ……」

突然、小さく舞菜が欠伸をする。

「そろそろ、カヤノが起きそうなのか？」

「どうやらそうみたいだね」

「飯はカヤノに任せるか？」

「それは大丈夫、もう少しカヤノさんは寝てるみたいだし、私が食べるよ。お片付けはカヤノさんにやってもらわなきゃならないかも知れど」

「そりゃカヤノは怒るかもな。片付けだけさせられたって」

「前は私がお片付けだけしたからおあいこだよ」

「そっか、それじゃ、飯にするか」

「うんっ」

食卓に朝食が並んでゆく。

腕をめきめきとあげていったのだ。

それは大好きな兄のためであり、大好きな恋人のためだった。

「お兄ちゃん、今、カヤノさんのことを考えていたでしょ」

「なっ……どうしてわかったんだ？」

「えへへ、舞菜、おにいちゃんのことならなんでもわかるもん」

悪戯に微笑み、舞菜はくるりと踵を返した。

ひらりと、エプロンのフリルが揺れる。

妹ながらもそのかわいらしい仕草に思わずドキっとしてしまふ。しかし、舞菜はその余韻が残っているうちにエプロンを脱いってしまった。

舞菜のエプロン姿などそうそう見られるものではないだけに、少しどころかかなり残念だったが、それも仕方の無いことだ。二人分の朝食は、既にでき上がっていたのだから。

駆と、舞菜と、カヤノ。

兄妹で過ごす、楽しい朝のひとつとき。

子供の頃から病弱で、入院しがちだった舞菜とこうして一つ屋根の下で暮らし、朝食を一緒に食べることができるなんて、駆にとっては夢のようなことだった。

でも、これは夢では無い。

もちろんこは『狭間の世界』でも無い。

だからこそ舞菜がいて。

カヤノがいて。

そのどちらかが欠けている。

舞菜とカヤノ——二人は、二人で一つの身体を利用して、この世界に存在している。

カヤノの身体には、舞菜とカヤノの二つの魂が同居しているのだ。